

歴史と風土を物語る

特集

# 船橋の旧家

## まちなかの文化財 慈雲寺

### 海老川「長寿の橋」完成



稲荷湯（海神1）



神田昌彦氏邸（西船1）



玉川旅館の書



洋館風の吉橋理氏邸（北本町）

PHOTO  
ふなばし



文化2年（1805）に建築された大神保町の中山幸則氏邸

# 船橋の旧家

歴史と風土を物語る



今では茅葺屋根の家も少なくなった。大神保町中村平さんの家は明治29年に建築された。夏は涼しく過ごしやすいそうだ。



ケヤキ、杉、松、モミなど様々な木材がたくみに使われ、ガッチリとした構造が耐久力と安定感を生んでいる。(神保町 木村由之さん宅)



右側の板戸の割れ目は関東大震災の時のもの。(木村さん宅)

天保5年に建てられた木村さん宅  
重量感のある大きな屋根が印象的。



手入れがよく行き届いた庭が美しい。(木村さん宅)



三味線時計、と呼ばれる古い時計が重厚な雰囲気の一部屋によく似合う。(中村さん宅)



涼しげな縁側が旧家の風情を感じさせる。(中村さん宅)



ふすまをはずすと大広間になる。昔の家は祭り行事など人寄せを行うのに便利だった。(中村さん宅)



奥庭に面した長い軒先。四季折々変化する日本の風土にはやはり木造が合うようだ。(中村さん宅)



現代住宅ではほとんど見られない土間。がゆとりのある空間を作っている。(中村さん宅)

昭和10年7月から11年10月にかけて、船橋に太宰治が住んでいて、「虚構の春」「ダス・ゲマイネ」などの作品を書いていたことは、よく知られているが、その太宰がよくやって来ては原稿を書いていたというのが、市役所そばの「玉川旅館」という木造の大きな建物の旅館である。玉川旅館は大正6年の創業で、昭和8年に一部増築が行われた。太宰はその増築した一番南端の、多分海がよく見えてよかつたんだらうなアと思われる「桔梗」という部屋が気に入っていたそうである。静かな部屋で4畳半に3畳がその奥に寝所のようになっている。

そう言えば、昭和8年から11年にかけては玉川旅館のすぐ隣の三田浜楽園に川端康成がよく滞在しては「童話」などの作品を書いている。期せずして二人は同じ場所、同じ船橋の海を見ていたのだろうか……。

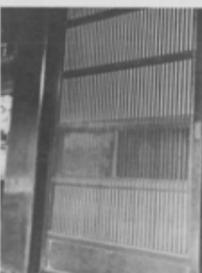
太宰が船橋を去って約半年後の昭和12年4月1日、船橋町は船橋市となった。

なってしまう……。建坪約70坪茅葺屋根の立派な、大きな家である。近年、住まいをとんに新築し、そこに移ってからは傷みが加速度的に進んでしまったそうだが、家はやはり人と共に生きているのだらう。

市街地にもどって夕暮れの路地裏に行く。西洋風のユニークな建物特徴ある山口横町の鈴木眼科。中通り商店街の際際(きざもの)屋、抱山堂。国道14号線から海老川(うまがわ)に大宮へ抜ける道の途中の興花園という花屋さんなどいかに古くからのお店という風情である。

昭和10年7月から11年10月にかけて、船橋に太宰治が住んでいて、「虚構の春」「ダス・ゲマイネ」などの作品を書いていたことは、よく知られているが、その太宰がよくやって来ては原稿を書いていたというのが、市役所そばの「玉川旅館」という木造の大きな建物の旅館である。玉川旅館は大正6年の創業で、昭和8年に一部増築が行われた。太宰はその増築した一番南端の、多分海がよく見えてよかつたんだらうなアと思われる「桔梗」という部屋が気に入っていたそうである。静かな部屋で4畳半に3畳がその奥に寝所のようになっている。

中村さん宅の大阪格子



「嫁に来た頃には毎日この戸障子みがかされたまんですよ。今は娘にやってもらってます」。黒光りした目の細かい大阪格子と呼ばれる格子戸をソロリと開け広げるとおばあさんは家の中をあちこち案内してくれた。どの部屋も彼女が朝に夕にみがかきこんだ柱や床が黒々と光っていて言い知れぬ深みを放っている。

市内の旧家を求めて私達は先ず市内北部、大神保町の中村平さん宅を尋ねた。県道夏見・小室線、県民の森横に入った奥の、覆い茂る深い緑の中に中村さん宅があった。「いつ頃建てられた家なんでしょうか。」「市で数年前に調べてもらった時に、上棟札が出てきたんですが、それによると明治29年とあったようですよ。」「

こまめに手入れされたカラハママの庭や、三味線時計と呼ばれる古風な柱時計の淡い音色に、この家の永い歲月の余韻が感じられた。大神保町は古い集落である。徳川三代将軍、家光の代、つまり寛永が遠くとも次の四代家綱の慶安頃までに現在の集落ができたと考えられている。集落は各々の屋敷地の集合で、その屋敷地は、主屋を主とした建築物と、それを取り囲む豊かな樹木からなっている。自然と人工との調和のとれた、近世農村集落がそのまま存続され、生きつづけている。

浦台の林武さんの家も市内で有数の旧家である。国道296号線、二宮出張所前を成田方面に少し進んで、右側の大きな長屋門のある家である。その長屋門をくぐってみるとにした。車の多い成田街道沿いにある家とはとても思えぬ程、屋敷内は静かだった。庭の片すみに見事な山クスの大木があった。その大木のすぐ近くの納屋のヒサシの下で、林さん夫妻が枝豆の出荷準備に精を出していた。「この家は300年程前に建てられたんですが、住まなくなってきたら急には急にもひどく



300年程前に建てられた林武さん宅。(滝台) 住まなくなった途端に傷んでしまったようだ。



農家の生活をいろいろ話してくれた藤代さん(高根)の奥さん。



天水桶がわりの大釜(藤代さん宅)



庭の桐の木が美しい山崎倫男さん宅(海神町北)



昭和22年頃永井荷風がよく訪れた海神山の一隅に山崎さん宅はある。このあたりは昔別荘などのある高級住宅地として知られていた。



成田街道ぞいにある林さん宅の長屋門。屋根だけでも50坪もある大きな門だ。



興松さん宅の座敷。暑い日でも中はとても涼しい。



中野木町には古くからの農家が多い。(興松守次さん宅)



古い農家の家の間取りは同じような形が多い。仏壇、神棚は家のほぼ中央にある。(三山の岩佐さん宅)



「私達はやはり和風の家が落ちついて好きですね」と三山の岩佐さん。

庭に井戸端がある三山の岩佐光一さん宅。昔の農家は井戸、便所、風呂場などの水まわりは母屋の外に作られるのが普通だった。



約350年前に建てられた加藤光さん宅。加藤家は約700年の歴史があるといわれている。



今でも長押(なげし)には槍がかけられている。



「昔は自分の領地を見てまわるのにカゴで1週間かかったそうですよ」と加藤さんの奥さん。



長い歴史を感じさせる加藤さん宅の居間。





700年の歴史を誇る慈雲寺



船橋時代の太宰治がよく訪れて原稿を書いていたという玉川旅館の「桔梗の間」(湊町)



仲通りで35年間際物(きわもの)屋をつづけてきた抱山堂。(本町) 近所の人達が集まるひと時に下町の風情があふれている。



大正14年に建てられた鈴木眼科。(山口横町) モダンな洋館風の木造建築で白とこげ茶のコントラストが印象的。

# 新しい文化財

## ①9 慈雲寺

〔所在地〕 船橋市宮本6



昭和初期の面影を色濃く残している玉川旅館。中に入ると、まるで別世界の感があった。

仮称宮本公民館の建設工事現場を見たついでに、呼台の慈雲寺まで足を延ばした。住職の野口宗雄師が旧知である。在宅かどうか不安だったが、門を叩けばオウと返事があって、まだ若々しい坊主頭の様子が現れた。客間に案内されると、奥さんがお茶をいれてくれた。また、チャージング！

慈雲寺の開山は至って古く弘安の初め頃という。小田原北条氏の絶大な庇護の下に栄え、盛時は二十数万坪の寺域を誇った。諸塔頭が競い立っていたが、北条×里見合戦に焼失したらしい。徳川將軍家が面倒をみていた時期もあったというが、江戸中期には既に小寺になってしまった。和橋戦争で和橋宿と共に焼失した。いまは昔の威勢をしのぶすがも無い。しかし、小田原・最乗寺を本山とし、川奈部薬局店主を講元さんに仰ぐ、地元の導了尊(どうりょうそん)詣りは連絡と続いている。住職さんの夏も忙しくなる。



「お盆はいそがしいですよ…」と興花園の興松さん。昭和23年からここで花屋を続けてきた。(宮本2)



玉川旅館の長い畳の廊下。昔はこのすぐ下までが海だった。



間引き疎開でとりこわしをまぬがれたという興花園。



永く人々のいこいの場として親しまれてきた。(稲荷湯)



昭和9年から営業している稲荷湯。(海神1)旧番地「の看板が今も残る。」



昭和10年に建てられた吉橋理さん宅(北本町)は今でも人目を引く洋館風。

### テレビ広報 船橋だより

## 未来を育てる 総合教育センター・武道センター

●再放送 8月30日(日) 千葉テレビ 46チャンネル AM 8:45~9:00

このほど完成し業務を開始した総合教育センターと武道センターを市民のみなさんと共にレポーターの安達香代子が紹介してゆきます。



静かな夏の慈雲寺の境内

### 市制50周年記念 テレホンカード・オレンジカード発売

船橋市制50周年記念テレホンカードとオレンジカードが、7月24日から発売されました。

- テレホンカード 3種類 1枚700円で市内テレホンカード販売代理店で発売。
- オレンジカード 1種類 1枚1000円で市内JR各駅およびJR船橋駅旅行センターで販売。

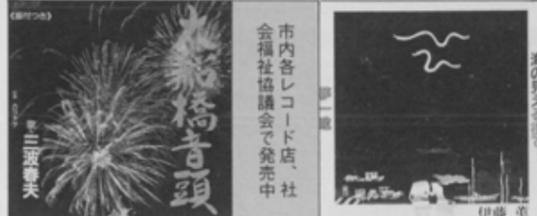
◎広報公聴課 ☎2014



### 市制50周年記念愛唱歌

大船橋音頭 海の見える街で…

作詞・歌 三波春夫 作詩・作曲 伊藤 薫  
作曲 遠藤 実 歌 伊藤 薫  
(B面 カラオケ) ¥500 (B面 夢一途) ¥500





120歳の大還暦を迎え、世界一の長寿者だった泉重千代さんの世界にたった一つしかない手形が新装なった海老川橋に飾られました。改修事業が進められてきた海老川は、昨年8月の台風により国から「激甚災害対策特別緊急事業」の適用を受け、現在さらに急ピッチで改修工事が進められています。この事業に合わせて今、海老川に架かる12本の橋が大橋和夫市長のアイデアと市内の芸術家の方々のご協力により、夢のある楽しい橋に生まれ変わっています。海老川橋を渡る時は是非この「長寿橋」の手形にさわってみて下さい。泉重千代さんの長寿にあやかれるかもしれません。写真は7月24日の御披露式で除幕を行う大橋和夫市長、牧野圭一氏(漫画家)、川村栄氏(彫刻家)、林利嗣市議会議長の皆さん。(右から)

# 船橋市はことし 市制50周年です...



編集だより

最近市内を歩いているとビルの建築が多いのに気がつきます。ちょっと通らないでいたりすると、いつの間にか新しい建物が建っていたりして驚いてしまうことがあります。街はどんどん新しく生まれかわっています。が、反面市内にはまだまだ歴史を色濃く残した古い部分も沢山見うけられます。今回の特集ではこうした中から「旧家」にポイントを絞って取材させていただきました。市内を北から南までかけ足、飛び込みの取材でしたが、おじゃまさせていただいた皆様には大変ご迷惑をおかけしたうえにお世話になりありがと

うございました。

今号でこのPHOTOふなばしも20号を数えました。映像時代の今、写真を通して「我が街」を紹介しているというこの試みですが、20冊を今改めて重ねて見ると、様々な街や人々の表情があって、その時々取材に際して市民の皆さんの温かいご協力がありたく思い出されます。またこのPHOTOふなばしは町会、自治会の皆さんのご苦勞によって配布されています。誌面をお借りし厚くお礼申し上げます。